

クラクフ核物理研究所を訪問

2016年8月13日から17日にかけて、ポーランドのクラクフにあるポーランド科学アカデミー核物理研究所凝縮系物理部門(Division of Condensed Matter Physics, the Henryk Niewodniczański Institute of Nuclear Physics, Polish Academy of Sciences)を訪問して、招待講演を行ってきました。同研究所と当センターとは長い共同研究の歴史があり、私(鈴木)自身も博士課程の学生であった2008年に、2ヶ月間共同研究として滞在させていただいたことがあります。この滞在で培った人間関係の絆は深く、その後も途切れることなく連絡を取り合っていました。最近になってからもMassalska-Arodź教授から「短期の滞在でよいので、もう一度訪れてみないか?」というメッセージを頂いた矢先に8月のウィーン訪問が決まったことから、クラクフにまで足を伸ばして研究所を再訪する運びとなりました。「せっかく久しぶりに訪れるのであれば、8年間の研究の進捗を講演するのがよかろう」と配慮いただき、招待講演の設定までしていただきました。

講演は“Vibrational and Rotational Motion of Lithium Cation Encapsulated in C₆₀ Fullerene Investigated by THz Spectroscopy and Calorimetry”という題目で行い、最近の私の研究内容を題材に、8年間かけて見えてきた世界の話をしました。とりわけ、阪大を離れていた4年間に取り組んだテラヘルツ波を使った研究の話は、いろいろな方に興味をもっていただきました。講演後、お茶をいただきながらMassalska-Arodź教授をはじめ、前回の訪問でご尽力いただいたWasiutyński教授や5月までセンターに滞在されていたBałanda教授と懐かしい話題を交えた様々な議論に花を咲かせました。また、Ewa, Gosia, Piotrek, Mirekといった近い世代の面々とも近況を報告し合い、それぞれが抱いている現状への思いを話し合いました。滞在中は、新しくなった研究所の実験室の案内もしていただきました。この8年間で、研究設備が驚く程充実したことがわかりました。設備の充実は、道路や駅の整備など研究所の外でも目覚ましく進んでおり、その様子は、2006年に旧東ドイツを訪れた際の印象と重なるものがありました。また、20代の学生の英語能力が非常に高くなっていることにも驚かされました。「今、ポーランドでは3カ国語以上話せないとまともな職には付けない」という秘書さんの話が印象的でした。

写真はクラコフの旧市街地の様子です。研究所の近くから市電(トラム)に乗ること20分ほどで、賑わいのあるクラコフ旧市街地に出られます。かつてポーランド王国の首都であったこの街は、その面影を今に残しており、観光都市としても栄えています。議論を終えて、夕方の旧市街地をのんびり散策できるのもこの街ならではの楽しみでした。

本滞在に際して、クラクフ核物理研究所より援助いただきました。感謝申し上げます。

(鈴木 晴)



A view of old town in Kraków.